

これはオッペ検査で「オカ」になり入院できたことで、毎日ベッドの上で寝たり食事ができて、まるで地獄から天国へ来た心地がするほど気楽な身分になれたからだ。また帰国一、二年前には抑留軍人による楽団演奏会などの慰問も受けたり、また帰国前のナホトカで野球試合をやったが、ちょうどここで巨人軍の水原選手が投手として登板、相手チームはだれも打てなかったことを聞かされた。

私達は思い出と深い絆を後に昭和二十四年八月、無事ナホトカより舞鶴港へ上陸、帰国いたしました。

## ソ連軍侵攻そして抑留

京都府 小西源吉

### 出生から入隊

京都府竹野郡丹後町上野（旧竹野郡下宇川村上野）にて、大正六（一九一七）年十二月四日生まれる。下宇川尋常高等小学校を卒業。卒業後は間人バス会社に

入社。

父、母は弟出産後死亡、兄夫婦と自分の四人。

### ソ連軍侵攻前

昭和十四（一九三九）年三月十日、満州国新京（長春）南嶺、関東軍自動車第一連隊第四中隊に現役兵として入隊。

在隊中の主な行動はノモンハン、支那<sup>せつがん</sup>浙贛作戦、熱河討伐。

昭和二十年三月、部隊より陸燃四平本部に転属し、勤務は関東軍司令部にいた（第四課）。その後出張所が設けられた。人員八人。

### ソ連軍侵攻

ソ連軍は八月九日、満州に侵入したので、新京出張所を閉ざして四平本部に引き揚げる。関東軍司令部では書類を燃やす煙が各所に上っていた。トラックに人員と荷物を積んで南下した。道中、野戦貨物廠の前の通りは満人が食糧の奪い合いで、走るのに苦労した。

四平本部は作業中止。部隊長、少将小川団吉閣下は会議に出席で不在。各部の将校の指揮に従って行動し

た。

## 終戦

終戦詔勅後は八月二十三日、四平で武装解除された。兵器が山積みにされ、満人が盗み、暴動を起こしていた。

私は、軍属、動員学徒、開拓少年義勇軍の少年と共に、ロシア兵が物資を持ち帰る貨物に積み込む使役をさせられた。

## 抑留地の生活

日本軍は大勢シベリアに連れ去られた後、我々もまた日本にウラジオ経由で送還するとたまされ、貨物に乗せられて北上し、二十年十二月四日、黒河駅に着いた。黒龍江の氷上を橇こで荷物を運搬、労役に従事した。酷寒零下四〇度の中での重労働。極度に身体が参った。そうして二十一年一月、シベリア領のブラゴエンチェンスクに着いた。

最初の捕虜収容所は山の中で、馬か牛小屋を改造した建物だった。シラミ、ノミが発生して夜も眠れない。衣服の洗濯、消毒などできない。入浴ができる設

備がしてないので、大勢入浴できない。何か月も入れない。

身体検査は、女医さんが聴診器なしで腹の皮を引っ張って等級を決める。外傷患者は作業を休ませるが内部の病気は特別熱がないと休ませない。医学は進歩していないのには驚いた。

作業は森林伐採で、雪の積もっている山中で、大きな鋸のこぎりを持って二人一組で大きな原木を切り倒す。次に運搬集積して検査を受けノルマの%が決まる。大変な重労働で、身体の衰弱が目に見える。

## 労役

原木を切り倒す際に、思わぬ方向に倒れるときがあり、大声で呼んでも、近くの人が身体の栄養失調から耳が聞こえないし、動作も雪とともに遅いので、倒れる木の枝ではね飛ばされたり木の下敷きになり、負傷者や死亡者があった。毎日悲しい出来事ばかり。夜は南京虫、シラミ、ノミで眠れず、地獄の生活だ。

山の雪も消えて六月ごろ、森林伐採も終わり、部隊はバイカル湖の近く、イルクーツクの収容所に移動し

た。今日までと違い大きなラーゲルだった。しかし、寝る床の分は狭く窮屈。南京虫とシラミは多くいた。

作業は石山（碎石場）で、岩石を割って、一輪車（ネコ車）で貨車の線路の近くの集積場に運ぶ。作業が終わると、ノルマの検査にマッセルが来て調べる。

仕事に慣れてくると要領よく立米もごまかしてノルマを上げた。積み石の中に空洞を作り、穴の上に大きな石を乗せて周囲から見えないようにして立米を増したり、昨日の碎石につけてごまかした。

#### 抑留者の統制管理

作業場やその往復の監視は、自動小銃を持った監視兵がついていた。特に悪い兵は、抑留者の持ち物で、身に付けている時計、バンド、珍しい物を取った。また、作業に出た留守に、ラーゲル内でリュックの中の品物を盗む被害に遭った。

捕虜生活も二年を過ぎた頃より部隊と離れ、少数で自動車工場、パン工場、肉工場に指名されて作業に出た。ある肉工場では、外套の襟をふくろばして肉を詰めて営門の身体検査を無事通過。ラーゲルに帰って戦

友達と食べたり、パン工場で不良品を頂いて帰り、戦友達と食べたときの美味しかったことは、忘れることができない。ふだんは肉やパンなど食べたことがなかった。

#### 帰還

昭和二十三年三月ごろ、建築現場の使役に行き、ロシアの職人とれんが積みをしていて足場板を踏み外し、私が土間に落ちて足を負傷したが、骨折せず辛かった。おかげで作業免除になった。

ラーゲルでは毎日、共産主義教育が続いた。そうするうちに帰国者の名前が呼び出された。これで死ぬ思いのした重労働と恐ろしい冬から逃れられるとホッとした。やがてラーゲルを出発。貨車に乗りナホトカ港内の収容所に着くと、船体に日本赤十字のマークに「高砂丸」の記名がしてあった。病院船が停泊していた。夢ではないかと思った。

五月二日、乗船が始まる。タラップで船員に引き揚げられたときは、これで帰国できるといふ実感がわいた。五月五日、舞鶴港に上陸した。米軍の取調べその

他が終わり、五月八日、無事復員した。

悲惨な生活環境の下でよくぞ生きて帰ったと喜ぶと同時に、死去した戦友を思い出して御冥福をお祈りします。

## シベリア抑留記

京都府 畑本 勝

私は、和歌山県粉河町で大正十二（一九二三）年十二月二十四日に生まれ、昭和十四（一九三九）年十月、満州開拓義勇隊に入隊。三カ年の訓練を終え昭和十七年に開拓団に移行。昭和十八年に現地徴集。昭和十九年一月、東安省密山の奥の第十二国境守備隊に入隊。ソ満国境警備に当たる。

昭和二十年、一二六師団司令部勤務（師団長当番）。昭和二十年八月九日、牡丹江掖河にてソ連軍が侵攻。それからの一週間大変な戦闘が続き、その間多くの戦友が次々と戦死された。

終戦の詔勅は横道河子で八月十六日、聞く。

八月十八日、横道河子で武装解除され、五、六日してから牡丹江の飛行場より師団長等と二十六人ぐらいで飛行機でシベリア、ウオロシロフに連行される。約四カ月間将官収容所におり、その後労働大隊に編入され、ハバロフスク第二収容所にて、造船所、コルホーズ、ソホーズ、糧秣倉庫、貨物の石炭降ろし等色々な作業をさせられた。仕事が終わり帰りに少しの坂道でもふらふらで、一気に登れないときもあった。あのこときのことを思えば、よく帰ってこれたものだと思う。

ハバロフスクに約二年、その後「ダモイ」の声で、さあこれで帰れるなど意気込んでナホトカに向かい港に着いたが、何の都合か、港より少し離れた収容所に入れられ、主に港湾工事。私は炊事勤務。収容所の住居は板囲いの上下二段になった宿舎で、特に南京虫が多く、夜も十分眠れないときも多かった。

昭和二十四年九月一日、明優丸に乗船、待ちに待った引き揚げの途につく。

私は和歌山県出身ですので昭和二十四年九月に郷里